

「羊飼いなる主」

(詩篇23・1-6)

一、主は私の羊飼いです

1節に「主は私の羊飼いです」とあります。神と私たちの関係を語る上で、これ以上の適切な比喻はないと思われ、続きを見てまいりましょう。「私は乏しいことがありません」とあります。神を信じますと、すなわちイエス・キリストを信じますと、乏しいことがありません。その理由は、2節、3節に関係しますが、主が私の人生を導き、主がイエス・キリストを信じる教会を導いておられる、と知るからです。

二、主は私を緑の牧場に

2節を見てまいります。「主は私を緑の牧場に伏させ、いこいのみぎわに伴われまゝ」とあります。皆さまは、この聖句を見て、一面が緑のじゅうたんになっているような牧草地帯を、思い浮かべられるでしょうか。ですが、イスラエルにそのような場所はありませぬ。そういう状況の中で、「緑の牧場に」伏すためには、羊が羊飼いの後について行く必要があります。言い換えるなら、イエス・キリストの後について行く必要があります。そうしますと主は、へいこいのみぎわに伴われまゝ、すなわち、

私共のたましいをいやす水のほとりに導かれます。3節です。「主は私のたましいを生き返らせ」とあります。どういう意味なのでしょう。「生き返る」と訳されています。元のことばの意味は「立ち返る」です。どこに立ち返るのでしょうか。神にです。イエス・キリストにです。神のことばであるキリストの福音にです。人が神に立ち返るときに、本来のあるべき姿に戻ります。3節後半を見てまいりましょう。「御名のゆえに、私を義の道に導かれます」とです。このことばの主語は何でしょうか。「主」です。「ここに、数々の修羅場をくぐり抜けてきた「ダビデ」を思いまゝ。

三、あなたが共におられる

4節を見てまいります。「たとえ死の陰の谷を歩むとしても、私はわざわいを恐れません。あなたが、ともにおられますから」とあります。「死の陰の谷」とは比喩です。だれもが経験し、通る苦しみです。ですが、「怖いものがない」と、それが信仰を持つ者の一面なのかも知れませぬ。「自信過剰になる」という意味ではありません。神と共にいてくださるからです。4節後半の「あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです」とは、幾通りかの受け止め方があるようです。「むち」は敵を追い払うむちと受け止めたらいかがでしょうか。そして「杖」は、羊を導くときに使

う杖、敵を追い払う杖、羊が誤った道に行きかけたときに杖の曲がった部分で羊の首を引っかけて正しい道に導く杖と受け止めることができます。

四、あなたは食卓を整え

5節に「私の敵をよそに、あなたは私の前に食卓を整え、頭に香油を注いでください」とあります。私の杯は、あふれています」とあります。以前の改訂第3版は「私の敵の前で、あなたは私のために食卓をととのえ、」でした。口語訳は「あなたがわたしへの敵の前で、わたしの前に宴を設け、」でした。そうしますと、緊迫した状況で神が食卓を整えておられるようにも読めてしまいます。ですが、新改訂2017の「私の敵をよそに、あなたは私の前に食卓を整え、」ですと、神に敵対する勢力の前でも、それをものともせず「あなたは、」すなわち神は私の前に食卓を整えてくださると、読むことができます。その場合の食事とは、神が整えてくださる食事ですから、神との親しい交わりを指します。新約時代に当てはめるなら、聖餐式がこれに相当します。

五、主の家に住まう

6節です。「まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みが、私を追って来るでしょう」とあります。へいこいしきみと恵みが、私を追って来るで

しょう」とは、おもしろい表現です。ですが、原文がそのようなになっています。口語訳は「必ず恵みといつくしみとが伴うでしょう」とでした。ところが新改訂になり「いつくしみと恵みが、私を追って来るでしょう」とになりました。新改訂2017もそうなっています。一方で、カトリック教会の詩編現代語訳は「神の恵みといつくしみに生涯伴われ」となっており、フランススコム訳も「恵みと慈しみは生涯わたしに伴う」とでした。そして新共同訳は、全体としてかなりカトリック寄りのように思われるますが、「ここは恵みと慈しみはいつもわたしを追う」となっています。自分たちの側から神の恵みといつくしみを追いかけるのではない、恵みといつくしみが信仰者を追って来るとは、普通はなかなか思いつかないことですね。ですが、みことばがそのように語っているのです。最後に、6節後半を見てまいります。「私はいつまでも、主の家に住まいます」とです。「主の家」とは、神の御住まいです。モーセ以来ダビデの時代までは、幕屋が主の家でした。ソロモンが神殿を建築しましたので、それ以降は神殿が主の家となりました。ですが、イエス・キリストは御自身を指して、神殿と言われました。そして使徒パウロは、教団が神の御住まい、すなわち主の家であると語りました。私共にとって主の家は、教会の礼拝です。